

審 査 結 果 の 要 旨

論文題目 「Relation Between Thin-Section Computed Tomography and Clinicopathological Findings of Mucinous Adenocarcinoma」

(肺粘液腺癌における薄切 CT 所見と臨床病理学的特徴の関連性)

学位申請者 渡邊 創

本論文は、肺粘液腺癌を Thin-slice CT 所見から画像的に孤立性陰影(solitary type) (30 例) とびまん性陰性(pneumonic-type) (10 例) の 2 群に分類し、両者の関連性を他の臨床病理学的予後因子ならびに遺伝子変異の有無 (KRAS, EGFR) と比較、検討した論文である。結果、両者は Solitary type が、Pneumonic type より 5 年生存率ならびに無再発率は有意に予後良好なことが認識された一方で、病理学的所見や driver mutation 等有意な差は認めなかった。また転移再発形式はすべて経気道を介した肺内転移が示唆された。

粘液腺癌の組織形態が高円柱状且つ KRAS 変異の頻度が高いことから大腸類似腫瘍が示唆され追試験として肺腺系指標マーカーの TTF-1 ならびに大腸腺系指標の CDX-2 免疫染色を施行した所、CDX-2>TTF-1 の結果より、通常肺腺癌とは形態的差異のみならず腸への分化を一部有する腫瘍の性状が示唆された。肺粘液腺癌における solitary type と pneumonic type の識別は、術後予後予測に関して臨床的対応に方向性を与える有用な知見であり、博士論文に十分値するものと考えられる。

申請者の発表に関して各審査委員から次のような質疑がなされた。

- 1) Solitary type と Pneumonic type の定義に関する内容の明確化ならびに分類に迷う症例の有無
- 2) 各々の typing の画像的 분류の定義について また両群の関係は発見時の時間的变化に起因した一連の spectrum から構成されているのか それとも全く独立した機序で進展しているのか？更に pneumonic type では以前の画像の有無とその所見から進行速度を把握できなかったか？
- 3) Pneumonic type は予後不良であるが TNMstage における生存率の比較を行ったか？
- 4) 再発形式に関して、経気管支的に癌が生着する機序？
- 5) 1 mm 間隔で Thin slice CT をとる host に対する side effect は如何か？
- 6) Pneumonic type の粘液癌は粘稠痰が出現しやすいが、ムチン性状との関連性についての検討はなかったか？

申請者は、これらの質問に対しても自験例のみならず文献的な事例も交え論理的に答弁していた。また、申請者は肺領域における臨床全般的な幅広い知識に加え癌の腫瘍形態や分化ならびに癌を取り巻く周囲環境等病理学的知識も有していることが認識された。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員全員の一致で判定された。したがって、申請者 渡邊 創は東海大学博士（医学）の学位を授与されるに値すると判断した。

論文審査委員

主査	博士（医学）	田尻 琢磨	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	博士（医学）	岩崎 正之	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	医学博士	國枝 悦夫	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	博士（医学）	小熊 剛	医学部准教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	博士（医学）	河野 光智	医学部准教授	（医学研究科先端医科学専攻）